

派遣者番号	R7K17	氏名	栖原 麻衣
研究主題 —副主題—	説明的文章を読むことにおける想像力を働かせた授業実践 —ICTの効果的な活用を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	中村 和弘
所属	大田区立中萩中小学校	所属長	山口 勝己

キーワード：小学校 国語科 説明的文章 伝記文 想像力 感情認知能力 ICT

要旨： 東京都が示す「未来の東京に生きる子供の姿」を踏まえ、本研究ではそれを「より良い解決方法を見いだす力」及び「相手の状況や立場を理解する力」と整理した。本研究は、これらと想像力を働かせた説明的文章の読みとの関連を明らかにすること、併せてICT活用の有効性を検討することを目的とした。小学校国語科において説明的文章及び伝記文の授業実践を行い、学習者の思考過程や振り返りの記述を対象として、想像力の働きや思考の表出・変容を探索的に分析した。その結果、説明的文章では、情報や論理をつなぎながら筆者の意図や背景を補う想像力の働きが、伝記文では被伝者を一人の人間として捉え、自己の価値観と往還させながら読む思考が確認された。以上より、想像力を働かせた読みが、他者の考えや立場を踏まえた理解を促し、「より良い解決方法を見いだす力」や「相手の状況や立場を理解する力」を支える思考の基盤と関わることが示唆された。

説明的文章を読むことにおける想像力を働かせた授業実践 —ICTの効果的な活用を通して—

栖原 麻衣

1. 研究の背景と目的

近年、学校教育においては、社会の変化を柔軟に受け止め、自らの意志に基づき人生を選択するとともに、他者の立場や状況を理解し、思いやりや共感をもつことのできる子供の育成が求められている。「東京都教育施策大綱」(2025)の「未来の東京に生きる子供の姿」においても、理想的な子供の姿として示されている。本研究ではこれらの力を「より良い解決方法を見いだす力」及び「相手の状況や立場を理解する力」と整理する。これらは、言語を媒介として他者や事象を理解する認知的な働きの関わりが深いと考えられる。

国語科は、言語を通して思考を深める教科であり、学習指導要領においても、他者との関わりの中で思考力や想像力を養うことが目標として掲げられている。想像力は、教育心理学や発達心理学の領域において、経験や知識を基に未知の状況をイメージし、人間の認識と創造活動の中核を成す心的機能として位置付けられてきた。小学校国語科における想像力は文学的文章の読解において扱われることが多く、説明的文章の読解過程における働きについては、十分に検討されているとは言い難い。

そこで本研究では、説明的文章及び説明的側面をもつ伝記文の読みにおいて想像力を働かせる授業を構想・実践し、その過程で見られた学習者の理解や思考の変容を分析することを通して、「より良い解決方法を見いだす力」や「相手の状況や立場を理解する力」の涵養につながる可能性と、ICTの効果的な活用の在り方について探索的に検討することを目的とした。

2. 理論的背景と研究の視点

想像力は、経験や知識を基に、直接知覚できない事象や状況を補いながら意味を構築する認知的な働きとして捉えられてきた(ヴィゴツキー, 2002; 内田, 2023)。本研究では、想像力を、「人間が過去に経験した要素を基に、新たな状況や行動を構成するために、全体と部分を往還しながら意味を構築する力」として定義する。また、共感の影響を受けるものと捉え、共感の構成要素のうち感情認知能力は想像力を養うことで育成可能なものとして位置付けた。

学習指導要領では、想像力は主に文学的文章の読解における指導事項とされてきたが、説明的文章や伝記文の読みにおいても、情報や事実を既存の知識や経験と結び付けながら理解を深める過程において重要な役割を果たすと考えられる。とりわけ、伝記文は説明的側面と文学的側面を併せもつ文章であり、その両側面と学習者の思考を結び付けるにあたり、想像力を働かせることで従来の共感的な読みを脱却できる可能性が示唆された。

さらに、本研究では、学習者の思考過程を可視化し、共有する手立てとしてICTを位置付けた。実践においては、学習者が自己の考えを外化し、他者の考えと比較しながら、自己の考えを更新する過程を支えるためのツールとして活用する。

3. 授業実践とその分析

(1) 説明的文章の読みに想像力を働かせた授業実践

都内公立A小学校第4学年2学級51名を対象に、説明的文章の読解を通し、事実や情報の正しい理解にとどまらず、筆者の意図や背景及び要約文の読み手の立場を想像しながら

ら読む授業実践を行った。学習過程では、ICTを活用して学習者の考えの共有を行い、他者の視点や助言を踏まえながら、自己の考えを更新する活動を位置付けた。

分析の結果、説明的文章の読みにおいて想像力は、文章における情報と学習者の論理を結び付けて理解を深める働きとして機能していることが明らかになった。また、筆者が選択した事例や表現の意図を補いながら読む思考の表出も確認された。想像力を働かせた読みが、内容理解の深化、筆者の意図や中心事項の明確化、学びの転移につながった。

(2) 伝記文の読みに想像力を働かせた授業実践

都内公立A小学校第5学年2学級52名を対象に、伝記文の読解を通して、筆者の意図を捉え、被伝者の行動の選択理由を想像しながら読む授業実践を行った。学習者は、筆者が描こうとした被伝者像や実際に被伝者の置かれた状況や背景を踏まえつつ、自己の価値観と往還させながら考えを形成する活動に取り組んでいた。学習過程では、ICTを活用して学習者の考えの可視化・共有を行うとともに、授業で活用したワークシートや振り返りをクラウド上で一覧できるよう、授業をデザインした。

分析の結果、学習者は被伝者を「功績を残した偉人」としてではなく、理由をもって行動する一人の人間として捉え、行動の背景にある思いや葛藤を想像する思考を表出していた。また、被伝者や学級の友達の価値観を想像的に理解し、これからの自己の生き方について考える記述が見られた。これらのことから、想像力を働かせた読みが、従来行われてきた「被伝者への共感・共鳴の読みの授業」から、「現在の自分の価値観からこれからの自己の生き方を考える授業」への転換に向かう可能性が示唆された。

4. 成果と課題

本研究は、説明的文章及び伝記文の読みににおいて想像力を働かせることの意義とその可能性を検討してきた。その中で、説明的文章では情報や論理をつなぐ思考が、伝記文では人物理解と価値観との往還が、それぞれ想像力を通して促されることが明らかになった。そして、想像力を働かせた読みが「より良い解決方法を見いだす力」や「相手の状況や立場を理解する力」を涵養する可能性が十分にあることが示唆された。また、ICTを活用した思考の可視化や共有は、他者の考えを手掛かりに自己の思考を更新する手立てとして一定の有効性をもつことが示唆された。

一方で、想像力を働かせた読みの見取りや評価には方法論的な限界が伴うとともに、想像力や感情認知能力といった内面的な働きは、単元の授業内の様相だけで示せるものではない。そのため、継続的な学びの中で検討していく必要があることが明らかになった。また、ICTの活用については、効果を一律に肯定するのではなく、学習内容や発達段階との関係から慎重に捉えていく必要があることも示唆された。

本研究は、特定の学年・実践を対象とした探索的分析であり、「想像力を働かせた読み」としての結果の一般化には課題が残る。今後は、実践の蓄積や分析方法の精緻化を通し、説明的文章における想像力を働かせた読みの教育的意義を検討していく必要がある。

主な参考文献

- ・東京都教育委員会 (2025) 「東京都教育施策大綱」
- ・エリ・エス・ヴィゴツキー (2002) 『子供の想像力と創造』新読書社
- ・内田伸子 (2023) 『想像力 生きる力の源を探る』春秋社
- ・文部科学省 (2018) 『平成29年版小学校学習指導要領 国語編』東洋館出版社